

櫻島の記：雑録

著者	千葉，秀樹
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 1
ページ	5 6 - 6 9
発行年	1911-06-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/6238

雜 錄

櫻 島 の 記

千 葉 秀 樹

春の休暇を利用して、毎年動植物の先生が、標本採集に出かけられる。そして實地研究の爲め生徒が必ず御供をする。

此れは『生徒無くんば標本とれず、先生無くんば採集費出です』と云ふ所から來た一種の *Myadriosis* の好例を示すわけだ。

此の一行には何時も二部乙の一、二年の人も加はる。しかし何うしたのか近頃は博物教室に通常來る人すら無いので今年のは三年生計りであつた。但し他の目的で一所に行かれた人は他の組にあつた。

で此の様な機會を利用する事が、或は來年から立消ねになりはすまいかと思はれる。それで此んな物を書いて諸君に此の面白い機會を御知らせすると同時に他日の御參考に供する。

今年の目的地は櫻島であつた。従て海產動植物を採る用意をせねばならぬ。荷物は大概學校の方で送られる。僕等はブラントンを見るのを第一の樂みにして行くのであるから、顯微鏡は是非入る。ウニの解剖もやつて見ようと云ふので解剖皿も持つた。骨切鋸や骨切鋏も借りた。參考書も持つて行かねばならぬ。學校のと

自分等のとを野村貫一君と二人で分擔した。明朝午前三時半上熊本に集ると約束して、試験の終りの日を別れた。

四月一日

三月の夜は、まだ西の空に残つて居さうに思はれる午前二時頃家を出た。怖ろしく風が強い。

物さびしい電燈の光をあびて、さらさらと散る藤崎社の前の櫻は美しかった。

一行は助手の清水君、小使の鶴田君、及野村君と僕との四人に霧島に廻る連中を加へ十人程あつた。山下先生は熊本驛から乗られた。

眠い目をこすりこすりやつて來たのに、汽車が込んで座る所も無い。大いに悲觀する。

飯を食つて、來たの來ないのと、くだらぬ話しがつづく。車が球磨の清流に沿うて走る頃から漸く明るくなつて來た。流れ計りは白く見わたるが、向ふ岸の山はまだ眞黒だ。

『清水君の焼いた寫眞の様だ』と飛んだ所で冷かされる。人吉を過ぎてからは、愈々土嚢の研究でもする様な隧道づくめ。

しかし此の邊の景色は、なかなか捨てたものでない。遠い日薩の連山は紫に映れて、近い村落の炊煙は細く、細くたなびいて居る。

新緑の松が、麗はしい山櫻を包んで立つ谿谷もあれば、山火事でやけた粘木がさびしく處々にあつて、下は一面に春の草が萌え初めて居る平地もあつた。

少しは人も減じて一行に座らぬ者は無くなつた。角帽が二人居る。其の氣焔が大したもので、拙者どもの解つたのは、曰く、Pathologie 曰く、Cover 其の他 Durchbohren など、大方福岡あたりの先生方であつたらう。大學の徽章が付いて居つた。温なしい山下先生でさへ『毆打たかつた』との事だから推さないでも知るべしだらう。

兵隊さんが澤山乗る。其の言葉が鹿児島式だ。そろそろ行末も案じられるからと、其の話しを一生懸命聞て居つたが解らぬ方が多かつた。

吉松に着くと、霧島組は下車する。『わ土産をね』と慾張つた挨拶をして別れる。

某君の説明で天王寺山も拜見した。名物の話して他の一人が或理由の下に悲觀する。

菜の花は、もう散つて居る。磯の御殿は白い八重櫻の花と、燃ゆる様な紅の楓の若葉とで、春の装を凝して居る。

汽車を捨てゝからが事だ。車夫を雇ふにも荷物をこるにも、中々僕等の語學の力ではだめだ。

原口君と、七高に在學せられる野村君の友人とが萬事世話を焼いて下さる。それで舟の出る所までは行つた。

先生は用事があつて、別になられる。

元來原口君は歸省せられるのだが、僕等が通譯官として御頼みしたのだ。

舟はあつた、所でウニを浸る硝子壺を買はねばならぬ。止むを得ず舟の交渉は原口君にまかせて、七高の人が案内兼通辯で野村君と僕が買ひに行く。

愈々萬事整つて櫻島に向ふ。強い南風が帆船を驅つて、三十分計りしたら横山村に着いた。一年の有村君が
出迎へて下すつた。

有村君の御宅で晝食の御馳走になり、二時頃宿に行つた。荷物をかたづけ、茶を飲んでから丁度退き潮だつ
たので磯採集に出掛ける。

子供が大勢何か探つて居る。之れを利用して方言を聞く。丸で獨逸語だ。

ゴカイの事を Echdoch シャコに類した小さな甲殻類を Dachmach と云ふ。en を少し軽く云へばそれが此處
の言葉だ、決してエドに非ず、ダマに非ずだ。

採集品の名は、あとにまとめて書く。面白かつたのは十歳計りの男の子に『これはダマだらう』と聞いたら、
いとも流暢に Yes と來た。やれ獨乙語計りと思つたら英語もしやべるわいと恐縮した。

晩飯。驚く勿れ、之れも精神修養だと謹んで箸をとつたが、餘りのうれしさは、二杯漸く推し込んだ。

十日間、日に三度、合計三十回の精神修養、あゝ營養不良になりそうだ。寄宿に居る野村君さへ參つて居る。
標本の整理をして、有村君が町に出られると云ふので、大ききビンセットを買つてもらふ様に頼み、寝る。
寝ると云つても僕等の所は大變だ。Jerome, K. Jerome ちやないが “Three men in two beds.” としてもなほ
足らぬ。体格の悪い人間の敷くために作つたらしい、幅狭まの丈のつまつた、たまけに煎餅を三枚にわろし
た様な敷布團二枚、稍勝つた四枚の丹前は硬度三位はあらう、それに二枚の藁がある。春宵の幾刻かを過す
べく餘りにひどい。

鶴田君が勇敢にも最難關の座を占領すると云ふので他の三人が二枚の布團の様なものに寝た。

四月 二日

七時頃眼を醒ます。二人が餘り引つ張つたので、中に寝た野村君は疊の上に居る。『なんだ此んな事なら始めから産の方がましだった』とこぼす。

また食事の用意がしてなかつたので、野村君と僕はブラントン採集に船で出た。三十分位で歸る。午前中は顕微鏡と首つ引きで一生懸命書をかく。毛もくぢやらの *Polyneta* の幼虫が居る。Stage も異なれば Variety も異なるらしく、ぞつとせぬ御面相で盛んに活動する。 *Enriopoda* のミヂシロに極めて似たのが居る。僕等此の連中には始めて御目にかゝるのだ。 *Copepoda* は例によつて澤山色彩の美しい奴が居る。 *Squilla* は三角港のと比較するとずつと小形の、曲尺五分位のが居つた、が何度見ても鱗の數や剛毛の數が不明で種を確定し得なかつたのは残念だつた。

Dinellagellata も種々あつた。妙に五つ六つ位塊^{かたまり}つて出て來るから、もしかと思つて接合したのを採したが見當らぬ。砒藻は五六種もあつたらう、數も至つて少なかつた。夜光虫の多いには、殆んど閉口した。午後は昨日と同じ磯に採集に行つたが澤山はされなかつた。

夜有村君の所から夏蜜柑を贈られた。誰も熱心に食ふ。

四月 三日

雨だが間も無く晴れる。午前は少しブラントンの採集をやり、晝からは霧島の連中を迎へながら、町の見物に出かける。途中 舟で行きちがつたのが何うも例の連中らしかつたので、唯、見物を主とする事とする。野村君の友人を尋ねる。道がなかなか解らぬ。中學生が澤山居つたのに聞いて見たが、例の言葉で少くも通

せぬ。聞かぬ方がよかつた。それにベラ棒な、奴等も日本語は確に使へる筈なのに、癪にさはつた。ぐるぐる廻つて行く中に筑紫莖を見付けた。

鶴田君と僕が探つて居る中に、野村君は氣があせると見えて、得意の駿足で先に行つたもんだから、遂にはぐれた。止むを得ず鶴田君と僕は聞き覚えの番地を云つて漸く尋ね當てた。所が肝心の野村君はまだ來ぬと云ふので今度は又探しに出た。しかし出會すじまいで、又歸つて見る、野村君も清水君も已に來て居た。これからは七高の方の案内で先づ七高見物。昔、懐かしい石橋を渡れば其處だ。

丁度居られた植物の教授に博物教室を見せて頂き度いと願つたら、心よく自身で案内して下さる。植物には熱帯の面白いのが大分あつた。

『君、僕の所は花壇が狭くてね……これでも此邊は近頃体操科と喧嘩して蠶食したのさ。』

五高は廣くていいね、此處にあるのは君の所からもらつた種だ』と快活に話される。

『櫻島に行らつしやいましたか』

『は、枇杷を食いに行きました』

『植物の變つたのでもありませんでしうか』

『そいつお僕はしらないね』

『ちや、先生は食物探集に計り行かれたのですね』

『や、参つたね』

と會話がつきながら、稍急な傾斜を下りて、新築中の温室に來た。その温室の入り口には、

「一寸いゝだらう、僕なぞは君、教務や体操科と年中喧嘩して、こんなもの迄造るんですよ。一体教室の脇に造るつて頑張つたんだが、餘り頑張ると造つてやらぬなんて事になりそうだったから此處で我慢したのさ。兎に角僕にはこんなだから後引きが必要だが山下君は温しいから君達が後押しをして、あの門の前の畑なんか皆花壇にしちまうといゝや」と盛んにヤジられる。

所謂鹿兒島のドンコウか澤山飼つてある池がある。動物の先生がヒキガヘルがた好きだそうな。成程教室でも懸圖は多くワクシヤンだった。

ヒトデの大きな標本がある、見ると産地は此處だ。

是非こんな奴を採つて歸らうとよく見る。

暫くして學校を辭した。二部の生徒が測量をやつて居る。大いに同情した。

裏の城山に登る。木立ちの美しい中を道が進む。天南星科のオホカラスビシャクに似た更に大形のものが目についた。採りたかつたが公園地で致し方がない。見晴しのよい所で休む。

西郷さんも、良い處で死んだなと思つた。

町に下りてから畫葉書を買つて歸島した。歸ると果して例の連中が來て居た。

しかし行き違つたのは、七高の生徒で、此の人達は御苦勞にも汽艦で有村の方に行つて廻つて來たのだと云ふ。

人數が殖ねたので半數は先生と共に別室に寝る事とした。

も一つ此處には苦痛がある。それは便所だ。……丁度机の引出しにする様だ。清水君なんか夜陰に乗じて海

岸人無き所に行つて、一度此處に入る事を脱れた程だ。

夜はトランプをやつて面白く暮した。

四月 四 日

天氣が良い。今日は海底の採集だ。晝飯も海で食う約束をして、雇つた潜水夫の舟に乗り出掛ける。

『何を採るのか』の説明が一寸考へものだ。兎に角通例取つても金にならぬものと云つたら潜水夫が笑つた。しかしよく解つたらしい。

小さい島が二つある。其の内沖の方の附近がウニ類が多いと聞いたので其處に向ふ。

島に舟をつけて、潜水夫が薪を拾ひに行つた。古下駄の様なものを、こゝでこゝで集めて来る。

焚火も用意整つて、舟は岸を離れた。やがて筋骨逞ましい潜水夫の身体は、水煙を上げて、海底に入る。

取りも取つたり、直先に方言シキイマラと云ふナマコ類だ。次で石灰珊瑚の小形なものを二三種、最後に大きい珊瑚を鐵ヲコを以て起し、綱で、舟の上に二つ引き上げた、

何れも美しい、大きな木耳の様な形だ。熊本までは持つて行かれまいと云ふので、大きい方を毀して、中に居る。小魚や、蟹をとる。

金魚の様に美しい小魚が四種、蟹が三種、蝦が二種程居つた。何れもピンセットで拾はれて、罎の中に納まる。筥貝の一種もあつた。之れは珊瑚の中に、穴をあけて入つて居る奴だ。珊瑚の表面にある孔は、貝の大きさに比して極めて小である。到底此の口から出入りは出来ぬのだが、何うしてこんな貝殻に入り込んで居るのか解らぬ。小さな時に珊瑚の穴に入つたとしても、出られぬ程、大きくなるまで、出ずに居る筈が無く、

文具が附着して居る所を珊瑚が漸々大きくなつて包み込んだとも猶ほ更ら思はれない。之れは他日の問題にとつて置いて良からうと思ふ。町の午砲は聞けたが、宿の舟は未だ飯を持つて來ぬ。腹が減つたと苦情云ふ事何度かで漸くやつてきた。

潜水夫が間拔けだから飯の菜になる様なものはとつて呉れなかつた。不味い漬物で濟して終ふ。今度は昨日七高で見た様なヒトデを取つて呉れと注文し島の西側に出た。風が立つて來たので脇櫓を手傳つて見たが、なかなか苦しかつた。

豫定の大ヒトデ一つ Comatula 二種。ウニ二種其他を得てから島に上る。磯採集をやる。緑色の一尺近い Ocyropsis、パン、など、いつもの濱に無い種類が澤山あつて、例のダマやエドは少ない。四時頃だつたう、歸路に就いた。

宿の前の濱に着いてから、採集品の陸揚げが一寸骨が折れた。大きい珊瑚は庭に蓆を敷かせて其の上に置いて他のものをフオルマリン漬けにしようとした。しかし氣のきかぬ事には石油罐の用意がして無いので早速宿の古い罐を譲つて貰い、ブリキ屋に頼みに行く。今夜は出來ぬと云ふので止むを得ず採つたものは海水に漬けて置く事とした。

四月五日

朝早く有村君が東京に行かれるのを送りそれから僕と野村君を除いた他の人達は御岳に登られた。僕等はブランドン採集をやる。

蟹の一種の Zena も出る。参考書にあるのとは体に刺が少ない点が違ふ。

先に見た *Phyllophora* の卵巢の良く發達したもの出る。

午後三時頃皆さんが歸られた。それから山の話が大分續いた。

宿の媼さんが『チギさん達』と呼んだので皆笑つた。野村君は此の間濱で、十計りの女の子が『ヨカニセさん』で呼んだつてよろこんで居たのに。

先生方が明日立たれるので支度忙しい。明日からは野村君と二人ぎりになるのだ。

四月 六 日

穩かな日だ。先生や他の連中を乗せた船は、朝の海を氣持ちよく帆走て行く。何だか俊寛僧都に同情する様な氣持もした。

何でも持つて來ただけの藥品で作れるだけの標本を作つて歸ると頑張つて、小間物屋さんの商品入れよろしと云ひたい箱二ばいの壇と、アルコール一封度、フォルマリン三封度を置いて行つてもらふ。植物採集用の胴籠も一つ。

晝から磯採集に出掛けたが此の頃は小潮で、面白い獲物は豫期されぬ。

實際採るべきものが無い。*Olygochaeta* の一種、やはりモモホウヅキのやうに塊まつて居る奴に始めて御目撃がよつたきり。

波打ち際を大分歩いて行く内、淡い朱を流した様な水の色の處へ來た。見ると夜光虫が群れて居るのだ。此の島では夜光虫を血波と云ふが其の理由が之れで解決された。

何は夜光虫が多いつて此んなに澤山居る話では未だ聞かなかつた。此の土地では普通の現象らしい。参考の

爲めに、*Tube* で其の邊を抄つて見たが、溶液に例へたら六十パーセント以上の濃度は確かにある。又夜光虫の群れた所には、必ずクラゲが居つた。*Ure* の直徑曲尺の一寸位で美しい種類だ。之れも抄ひ取つて三三半は集める。

磯山には鶯の面白い歌が聞える。ゆるく寄せるさざ波が小砂利の濱にやさしいさゝやきを立てる。

七高の白い端艇が近い沖を通る。オール響きが規則正しいスベースを置いて聞える。

暫くは岩に腰を下し、麗はしい春の海を眺めた。歸つてからは、獲物のフォルマリン漬けが仕事。例のクラ

ゲは色の保存を比較する爲め、アルコール漬もやつて見る。四つ計りは残してスケッチをする。体は云は

立派に四つの *Quadrans* に別れて居るが、縁邊の *Tentacle* は不等で、僕の書いたのは十七、二十一、二十

十九と云ふ數であつた。

夜は菓子など食つて見たが、寂しいので早寢にする。

四月 七 日

今迄朝計りだつたから今日は午後ブラシクトンを探る。少しは變つたのもあつた。

蟹の *Zoea* と *Megalopa* が出たのは嬉しかつた。*Cyclops* に類したの、*Antenna* の構造が馬鹿らしい御念の

入つた奴も見受けた。

何れも可愛らしい心臓をびこつかせて跳び廻るから面白い。

夜は濱に出て寮歌など怒鳴る。鹿兒島の町に春の火がゆらめいて見わる。

「先生達は今夜は樂觀だなあ」と布團のより薄くないのを戀しがる。

四月 八日

うつかりすると空壕を提げて歸る事になるからと磯の獲物を増す爲めに近いた宮のある島に行く。

歸りはプランクトンを探る用意もして出る。二三日の練習で怪しいながら櫓が押せる。でも自分では餘程うまい積だつたが船頭が怪しいと云ふ字を付け加へた。

小さい鯛の様な奴が群れて行く。先きには鷗殿が正に魚とり眼で扣けて御座る。

晝飯に迎ひに御出と船はかへす。早速採集にとりかゝる。

此處の濱は鐵鑛があると見えて岩が妙に赤錆を付けて居る。

水溜りの、褐藻の繁つた中から野村君が、ヨウジウヲを二疋とつた。「馬の様な顔の魚だ」と云つたら、何故か野村君が怒る。はてな何故だらうと考へたが頭の悪い僕には理由が解らなかつた。

ハマエンドウが美しく咲き乱れて居る、島の中央は小高くて、小さな祠がある。榕樹や何かこんもりと繁つて、南國の感じを深からしめる。

もう歸らうと濱に待つて居たが迎へが來ぬ。島に石を投げたり、島のスケッチをしたりして居ると舟がくる。プランクトンをとりながら歸る。明日は鹿兒島に泊らうと一決した。

夜になつて雨が降り出す、夜光虫を暗所で見やうとしたが顯微鏡では少しも見えぬ。あきらめた。荷物の始末も少しはする。有村君の所へ御暇乞ひに行つたら、又夏蜜柑を澤山に戴く。實は持つて歸るのに閉口した。二人でやり切れぬ程の荷があるのだから。

四月 九日

8. Nauplius of cyclops.
 9. A copepoda (Simularto Diaptomus Costen)
 10. Protozoa of a clay fish. ?
 11. Zoea of a crab.
 12. Megalopa of a crab.
- 植 物

1. Diatlagellata. (6 Kinds)
2. Diatom. (5 Kinds)

以上の外澤山あるが、何類か不明なものが大部分である。天草の旅の時の、或は三角港のそれと比較すると列記したものゝ中にさへ相異の大なるものがある。是等の比較のみならず、講義で聞いた物で實物をしらぬものも、此の様な時によく見られる。廻らぬ筆も愈々油が盡きて此處に往生仕る。(完)

~~~~~  
 "Strong Son of God, immortal Love,——

Whom we that have not seen thy face

By faith and faith alone embrace

Believing where we can not prove;"

——(Tennyson)——